ISSN 1347-6211

東北大学

東北大学史料館だより

No.21
2014 Sep.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER

写真：第二列左から三人目が三好愛吉第５代二高校長、その右が沢柳、その右が早川智寛第３代仙台市長（阿刀田令造文書Ⅲ-5）

Index

2 大学アーカイブズの使命
東北大学史料館長 八鍬友広
4 大阪大学アーカイブズができるまでとできてから
大阪大学アーカイブズ 菅　真城
7 企画展を開催しました
8 資料の公開について
9 史料館のうごき
10「東北大学とノーベル賞」展の開催

沢柳総長の仙台着任

―史料館所蔵の沢柳関係資料から―

東北大学の初代総長となった沢柳政太郎は、長野県の出身ですが、すでに1897年（明治30）に第二高等学校の校長に任命され、１年余を仙台で過ごしています。十数年後に東北帝国大学の初代総長として赴任し、多くの二高時代の知己と再会することになりました。

東北帝国大学は、官制上は1907年（明治40）に発足します。当初は仙台の理科大学（後の東北帝国大学理学部）と札幌の農科大学（後の北海道帝国大学農学部）をあわせた学校でした。後者が前身の札幌農学校として30年以上の歴史を持っていたのに対し、前者はゼロからの立ち上げだったため、教授候補者たちの準備期間（海外留学）が必要でした。さらに沢柳自身も、文部省官僚の立場で東京高等商業学校（後の一橋大学）をめぐる混乱を調停するのに時間を要したため、1911（明治44）年４月にようやく辞令をうけ仙台に着任しました。４月30日に歓迎会が開かれましたが、その際の集合写真には、二高関係者や当時の仙台市長の顔が見えます。

沢柳総長の在任期間は１年余と短かったのですが、将来の総合大学に向けた準備や、女子学生誕生への道を開くなど、その後の東北帝国大学の方向性を定めたといわれています。

大学アーカイブズの使命

東北大学史料館長　**八　鍬　友　広**

佐藤弘夫前館長の後任として、2014年４月１日に史料館長に就任しました、教育学研究科の八鍬友広です。専門は、近世日本民衆教育史です。主たる研究対象が近世の民衆ですので、近代以後の最高学府である大学は、私の研究にとっては少し距離のある存在ですが、それでも教育史研究者として、大学史料館の運営に関与することは、ひとつの務めを果たす機会でもあると感じています。

東北大学史料館は、現在、「公文書室」と「記念資料室」というふたつの組織を持っています。このうち公文書室は、2011年に、「公文書等の管理に関する法律」に定める「国立公文書館等」の指定を受け、東北大学における特定歴史公文書の選定と管理に責任を負っています。毎年、保存期限切れとなる膨大な文書を評価・選別し、特定歴史公文書として保存すべき文書の選定をおこない、この保存および利用等の管理をおこなっていくことは、きわめて大きな意義と責任をともなうものであると思われます。とくに本年は、国立大学が法人化してちょうど10年目にあたり、10年保存の文書が期限切れをむかえますので、これらを選定する最初の年となります。これらの文書によって、法人化後の大学をめぐる動向が、今後ひとつの検証対象となっていくものと思われます。

以上の公文書とは別に、東北大学にかかわる種々の資料を受け入れているのが記念資料室です。おかげさまで、個人文書をはじめとする種々の資料を寄贈いただいており、毎年着実に充実してきています。とくに、昨年度寄贈いただいた「黒田チカ」文書は、史料館にとってまことに意義深い資料となるものと思われます。黒田チカは、この国で最初に帝国大学に入学した女性です。そしてその入学を許可したのが、ほかならぬ東北帝国大学でした。女子学生入学100年目にあたる昨年は、「『女子学生』の誕生 -100年前の挑戦 -」という企画展を開催し、好評を博しました。わが国で最初の帝国大学生となった女性に関する資料として、黒田チカ文書は、ひとり東北大学にとってのみならず、この国の大学史全体にとっても、きわめて貴重な資料といえます。本資料の公開までには、なお若干の時間を必要としておりますが、公開後には、おそらく多くの研究者・大学人・市民に関心をお寄せいただけるものと思われます。

なお、東北帝国大学がはじめて女子学生の入学を許可したときの資料の一部は、常設展コーナーにおいても展示されています。当時の文部省が発した、女子学生の入学許可に対して懸念を表明する文書です。文面には、強い圧力が滲んでいますが、東北帝国大学はこれをはねのけて女子学生の入学を許可しました。大学として気骨あるところを示したといえるでしょう。そんな一場面も、ぜひ来館の上ご覧いただければと存じます。

さて、冒頭にも述べましたが、私の専門は教育史です。東北大学の歴史のなかには、教育史のテ

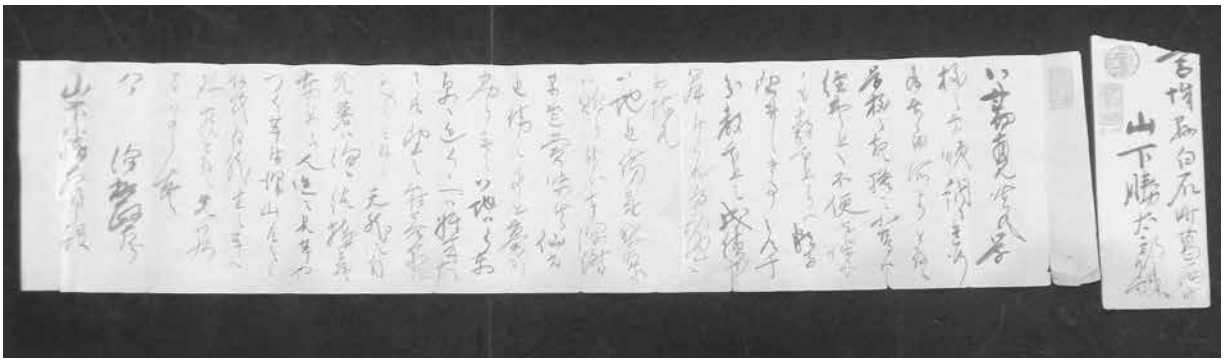
キストブックでなじみのある出来事も少なくありません。その筆頭は、やはり沢柳政太郎です。初代総長として、東北大学にとっても特別な存在といえましょう。私が、大学院生として最初にゼミで取り組んだ文献が、沢柳政太郎の『実際的教育学』でしたので、いまも印象深いものがあります。教育史に残る著作といえます。従来の思弁的な教育学を批判し、教育の現実に関する科学的な視点を強調したものでした。

この『実際的教育学』に対して、双璧ともいうべきものがあるとすれば、それは篠原助市の『理論的教育学』だと思われます。そしてこの篠原助市こそ、東北帝国大学においてはじめて開設された教育学講座（法文学部）の初代教授でありました。このように、近代日本における教育学の代表的な著書が、いずれも東北大学と関係を有していることには、感慨をあらたにするところがあります。

ところで沢柳政太郎は、後に「京大沢柳事件」というものを引き起こします。京都帝国大学総長に就任した沢柳は、独断で７名の教授を辞職させますが、分科大学教授会の議を経ずにおこなわれたこの措置に教授たちが一斉に反発、結局、当時の文相奥田義人が教授の任免に対する教授会の関与を認める覚書を手交して決着をみます。これは、教官任免に関する学部教授会の権限を認めたものとして、よく知られている出来事です。

沢柳事件から100年が過ぎましたが、つい先頃、教授会の権限を限定し、学長のリーダーシップを強化するという法律改正がおこなわれたところです。大学の在り方が大きく変わっていくことになるかもしれません。その帰趨がどうなるにせよ、史料館は大学アーカイブズとして、これからも東北大学の行く末をしっかりと記録にとどめていくことでしょう。

文書と資料を保存し、後世に伝えていくことは、アーカイブズの最大の使命です。いま、福島第一原子力発電所の事故をめぐって、ひとつの調書が話題になっております。文書・資料は、まさに歴史の番人であるといってよいでしょう。史料館も、文書・資料の保存と公開とによって、その使命を果たしていかなければなりません。皆様のご支援とご助力を切にお願いする次第です。



参考：沢柳政太郎の筆跡（史料館所蔵　山下元寿資料Ⅰ-2「沢柳書簡」）

大阪大学アーカイブズができるまでとできてから

大阪大学アーカイブズ　**菅　　真　城**

はじめに

大阪大学アーカイブズの現状について書いて欲しいという、東北大学史料館からの依頼である。同様の文章は、すでに国立公文書館の情報誌『アーカイブズ』51号（2013年）に「大阪大学アーカイブズの設置」という短文を書いている。より詳しくは、拙著『大学アーカイブズの世界』(大阪大学出版会、2013年）の第４・５章をお読みいただきたい。本稿はこれらと重複している部分もあるが、ご容赦いただきたい。

１．できるまで

大阪大学アーカイブズには二つの意味での設置がある。一つは学内組織としての設置で、2012年10月１日のことである。二つ目は公文書等の管理に関する法律施行令に基づき国立公文書館等として内閣総理大臣の指定を受けたことであり、2013年４月１日のことである。なお、公文書等の管理に関する法律（以下「公文書管理法」と略記）は、2009年に公布され、2011年に施行された。

大阪大学アーカイブズの前身組織は、大阪大学文書館設置準備室である。文書館設置準備室は2006年７月１日に設置され、同年10月１日から活動を開始した。文書館設置準備室の設置からアーカイブズの設置までには、６年以上もの長い歳月を要した。しかし、大阪大学におけるアーカイブズ設置への動きは、さらに国立大学法人化直前の2003年度末にさかのぼる。アーカイブズ設置までには、実に10年弱もの歳月を要したのであった。

文書館設置準備室が設置された頃には、公文書管理法は影も形もなかった。したがって、アーカイブズ設置の根拠となった文書「大阪大学文書館（仮称）設置構想」は公文書管理法とは無関係に作成されていた。そうしているうちに公文書管理法が公布され、これへの対応が大きな課題になったが、大阪大学では、文書館（仮称）の設置構想を変更することなく、事態は進展した。そして、公文書管理法は、文書館（仮称）設置を後押しした。学内事情により、最終的に設置された組織の名称は文書館（ぶんしょかん）ではなくアーカイブズとなったが…。その過程で、大阪大学において組織の存在を規定する根本規程である「大阪大学組織規程」に規定する組織とはしないこととされた…。大阪大学アーカイブズの設置根拠は「大阪大学アーカイブズ規程」(それでも「要項」設置よりは格上となった）であり、アーカイブズは大阪大学の組織図には載っていない…。いろいろなことがあったが、公文書管理法施行と同時に国立公文書館等として指定されていた東北・名古屋・京都・神戸・広島・九州の各大学の施設に続いて、公文書管理法施行後初めて大阪大学アーカイブズが国立公文書館等として指定された。この指定を受けるにあたっては、東北大学史料館をはじめとする先進各館に大変助けていただいた。改めてお礼を申し上げる次第である。

大阪大学アーカイブズ
OSAKA UNIVERSITY ARCHIVES

大阪大学では、なぜアーカイブズを設置するまでに10年近くもかかってしまったのだろうか。理由の一つに、アーカイ

大阪大学アーカイブズの置かれている管理棟

ブズとして必要な場所、特に書庫を確保できなかったことがあげられる。大阪大学には豊中、吹田、箕面の３キャンパスがあるが、当初文書館設置準備室は豊中キャンパスに置かれていた。この時代は教員室２室を借用していたのみで、専用の資料保存スペースは確保できていなかった。大阪大学の本部は吹田キャンパスにあるので、文書館の設置場所としては吹田がふさわしいと考えていたが、吹田そして豊中の両キャンパスで文書館として使用できそうな建物はなかった。2007年には、大阪大学と大阪外国語大学が統合して、箕面キャンパスも大阪大学のキャンパスになった。箕面なら場所が確保できるかもしれない。そう考えたが、まずは箕面キャンパス全体のマスタープランをつくらねばならないという執行部の意向があり、たやすく箕面キャンパスで場所を確保することはできなかった。そのような中、2011年４月に箕面キャンパスの管理棟内の３室（154㎡）に移転することができた。これは、文書館設置準備室の事務を担当していただいていた総務企画部企画推進課のご助力によるものである。そうしているうちに、箕面キャンパス管理棟の大部分を全学共有スペースとして使用することになり、申請したところ幸いにも全学的なご理解をいただき、2012年度からは管理棟の１・３階798㎡が使用できることになった。来年度からは、管理棟の２・３階部分に502㎡拡張できることになっている。

アーカイブズ設置に時間がかかったもう一つの理由は、学内合意形成に時間を要したことである。執行部が代わると、前の執行部では合意されていた文書館の必要性を再び説明しなければいけないこともあった。多くの人に尋ねられたのは、図書館、博物館との関係である。それらの質問に対しては、アーカイブズ独自のミッション（組織記録（法人文書）を取り扱うということに集約される）を説明して納得してもらった。「機関（組織）アーカイブズ」機能こそ、他の組織では担えないアーカイブズ独自の機能なのである。

本来、ある組織を作る場合、まずは組織を作ることを決定して、そのうえで必要なヒト・モノ・カネを配分すべきであろう。しかし、大阪大学ではヒト・モノ・カネは縦割りで別個に別の時期に要求しなければならなかった。これは何も大阪大学に固有なことではなく、多くの国立大学に見られる意思決定の弱点であろう。それでも、最終的にアーカイブズを設置していただいた執行部や関係職員の方には大いに感謝している。

２．できてから

どうやら「できるまで」で紙数を取り過ぎてしまったようだ。これは筆者の実務経験歴に比例していそうだ。今後の課題を含めて、「できてから」のことに触れておく。

学内組織として設置された2012年10月から国立公文書館等として指定された2013年４月までは、まさに国立公文書館等としての指定を受けるための準備が最大の業務であった。

「できるまで」に書くべきことだったかもしれないが、大阪大学アーカイブズには、法人文書資料部門と大学史資料部門の二つの部門が置かれている。そして、大阪大学アーカイブズが国立公文書館等として、大阪大学アーカイブズ大学史資料部門が歴史資料等保有施設として内閣総理大臣の指定を受けている。特定歴史公文書等として保存しているのは、保存期間が満了した法人文書（担当は法人文書資料部門）のみである。

前述したように、2013年４月１日付で国立公文書館等として指定を受けたため、2013年度からは保存期間が満了した法人文書の移管を受けることができるようになったが、同年度は移管に際しての準備を行うため、保存期間が満了した法人文書のうち満了後の措置が「移管」となっているものは、原則保存期間を延

長した。大阪大学法人文書管理規程では、法人文書を廃棄するにあたってはアーカイブズの同意を得なければならないことになっている。このため、約8000冊強の「廃棄」予定文書のうち28冊をアーカイブズに移管した。これらの文書の多くは、非定型業務に関するもの（例えば、大阪大学と大阪外国語大学との統合に関するものなど）であった。この他、総務企画部総務課から法人文書ファイル管理簿に登載されていない、いわゆる「簿外」文書172冊を移管した。これらの多くは、大阪帝国大学時代の例規類や新制大学としての設置認可申請書である。これら200冊の特定歴史公文書等は、2014年度から一般に利用に供しているが、利用は極めて少ないのが現状である。なお、特定歴史公文書等以外の歴史資料等は2013年度から一般の利用に供しているが、この利用も少ない。歴史資料等の利用者の多くは歴史研究者であるが、裁判のために利用された資料もある。

大阪大学アーカイブズ入口（奥が閲覧室）

本稿執筆時点（2014年７月）での最大の課題は、今年度から本格化する法人文書の移管を規定通りつつがなく行うことである。大量の文書数になる予定なのに加え、本格移管初年度ということもあって、かなりの困難を伴うものと考えられる。その実績については、いずれかの機会に報告できればと思う。

３．理念と現実の狭間で

筆者は、前掲拙著で、大学アーカイブズにおいては、資料を「活用」することより「公開」することが重要だと主張してきた。これは理念的考察の結果であるが、大阪大学アーカイブズの実態に照らしてどうであろうか。大阪大学アーカイブズでは、特定歴史公文書等（法人文書）もその他の歴史資料等も「公開」しているが、その利用者が極めて少ないのは前述したとおりである。Web の資料目録は PDF であり、利用者に優しいとはいえない。データベース検索システムを構築する必要がある。一方、「活用」はどうであろうか。公文書管理法（大阪大学アーカイブズ特定歴史公文書等利用等規程）では、「歴史公文書等の利用の促進」のために展示会を開催することになっている。大阪大学アーカイブズでは、国立公文書館の館外展示を共催したことはあるが、独自の展示会を開催できていない（独自の展示会場も有していない）。限られた予算の中で、興味を引く展示を行う工夫が必要である。

また、拙著では、理念的には、大学アーカイブズは教育研究の実態を示す資料や情報を集積しなければならないと力説した。しかし、実態としては、教育研究に関する資料としては講義ノートの寄贈を受けているぐらいであり、それも受け身の姿勢である。筆者の大学アーカイブズに対するアプローチは、理念と現実とで乖離している。筆者の発想のみでは、この問題を解決することは困難である。読者諸賢のご教示を乞いたい。

おわりに

大阪大学アーカイブズの歴史は、東北大学史料館に比して半世紀近くも浅い。ようやく制度設計が終わり、建築に取り掛かった段階である。今後どのような建築物を建設するかは、まだまだ課題である。大阪大学の取り組みは小さな一歩に過ぎないが、他大学とも連携を取りながら、日本の大学にアーカイブズ文化が定着するよう努力していきたい。

企画展を開催しました

◆新公開資料速報展「戦後東北大学と入学試験」 5月7日～7月4日

5月7日から7月4日まで、本館第1企画展示室内にて「入試課移管入学試験関係文書－戦後東北大学と入学試験」を開催しました。入試課移管入学試験関係文書は2008年度に教育・学生支援部入試課から移管され、この度整理を終えて、特定歴史公文書等として公開することになった文書です。この中から今回は昭和30年代から50年代にかけての入試問題や解答用紙のほか、入試の様相を示す写真資料を展示紹介しました。

◆コレクション紹介展「阿刀田令造先生像」　7月7日～24日

1946年に金山平三が描いた、旧制第二高等学校（戦後東北大学に包括）の元校長・阿刀田令造（1878～1947）の肖像画を展示紹介しました。金山はヨーロッパ印象派の影響を受けた風景画で知られる洋画家ですが、中央画壇と距離を置いた「孤高の画家」としても知られます。また1913年に東北大学に入学した日本初の女性大学生・牧田らくの夫でもあります。

モデルの阿刀田は、二高の教授を永くつとめ名教授・名校長と呼ばれた歴史学者・教育家です。仙台の郷土史研究にも多大な貢献をしています。

◆ミニ展示「看板からみる戦前・戦後の学生生活」　9月8日～30日

平成26年度博物館実習の一環として、当館に残る各種の看板等の中から4点を選りすぐり公開しました。昭和初期に使われた第二高等学校短艇部寮の看板や同じく旧二高明善寮の壁に寮生が書き残した壁書、戦後学内で掲げられた洗濯屋出張営業所の看板など、かつての学生たちの生活の息吹が感じられる資料が、学生たちのプロデュースによって陽の目を見ることになりました。

当館所蔵史料を出品します

◆『玉蟲先生像』（安井曾太郎 画）
安井曾太郎の世界－人物画を中心に－

ふくやま美術館（広島県福山市）
平成26年9月20日（土）～11月16日（日）

佐倉市立美術館（千葉県佐倉市）
平成26年11月22日（土）～12月25日（木）

◆井上秀雄収集拓本資料より3点
国際企画展示　文字がつなぐ－古代の日本列島と朝鮮－

国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）
平成26年10月15日（水）～12月14日（日）

＊休館日等の詳細については、両美術館のHPをご参照ください。

玉蟲先生像

資料の公開について

◆特定歴史公文書

平成14年３月31日付けであらたに764点の特定歴史公文書の公開を開始しました。
今回公開した主な文書は、下記の通りです。

①旧学生部移管文書　33点

旧学生部から1994年に移管された文書の追加公開です。1950年代の学友会関係資料や30年代の入学式関係資料、昭和35年の漕艇部ローマ五輪出場時の後援関係資料などが含まれています。

②旧総務部人事課移管　教員適格審査関係資料　208点

戦後 GHQ の指揮下で行われた東北大学の教員適格審査に関する事務書類です。審査委員会の記録をはじめ調査にかかる各種書類が含まれます。なお法文学部の適格審査については昨年度公開した石崎政一郎文書とあわせ見ることで詳細がわかります。

③旧学務部入試課移管教務関係資料　134点

旧学務部入試課教務第一掛より2003年に移管された文書の追加公開です。1960年代以前の大学院教務関係の書類を中心に、附属学校関係、学位記授与式関係などが含まれます。

④教育学生支援部入試課移管入学試験関係文書　146点

1990年代以前の入学試験関係委員会の資料、および1950～70年代の入試問題が含まれます。

⑤平成24年度末保存期間満了文書

平成24年度末に保存期間を満了した本部事務機校および各部局の文書です。

◆個人文書

●林鶴一資料

林鶴一（1873～1935）は徳島県出身の、和算研究で有名な数学者です。創設期の東北帝国大学に赴任し、日本で初めての数学専門学術雑誌である『東北数学雑誌』を刊行するなど数学の発展に寄与しました。死後その業績はまとめられ、『和算研究集録』(上・下）として刊行されています。本文書は論文など計56点からなり、1994年に御遺族から寄贈されました。

●布施現之助文書

布施現之助（1880～1946）は、戦前期日本を代表する解剖学者です。スイスのチューリッヒ大学のモナコウ教授のもとで神経核の研究を行い、その成果が『顕微鏡的人脳図譜』として出版されました。その後1915年には東北帝国大学医科大学教授となり、1941年の停年退職まで解剖学を講じ、1921年には帝国学士院恩賜賞を授与されました。1928年には医学生の寄宿舎である昭和舎（2000年９月焼失）を建設したことでも知られています。本文書は布施の論文、観察記録など計928点から成り、大半が2006年に医学部解剖学教室から寄贈された資料です。

史料館のうごき

◇第１回大学アーカイブズセミナーの開催（７月14日　史料館閲覧室）

今年度より、史料館の所蔵資料や実践経験をテーマに大学史やアーカイブズ学について学ぶ「大学アーカイブズセミナー」を年２～３回の予定で開催することとなりました。

第１回は、永田英明氏（東北大学史料館）が「東北帝国大学の戦時体制と関係資料」というテーマで、戦時下の学徒動員・学徒出陣や大学運営に関する資料の現状と研究の課題について報告をおこないました。学内を中心に７名が参加し、活発な質疑が行われました。

◇平成26年度の法人文書の評価・受入を行いました

平成25年度末に保存期間を満了した法人文書の中から本学の「特定歴史公文書」として129点の法人文書を受け入れました。あわせて、平成26年度末に保存期間を満了する予定の文書の評価をおこない、移管予定となる文書を選定いたしました。引き継ぎを完了した文書については、今後、内容等に関する点検調査を行い公開する予定です。

◇平成26年度博物館実習を実施しました

博物館法の改正に伴い開設された「博物館実習Ⅵ」(館園実習）の一環として、９月１日から５日まで実習授業を行いました。実習では、その成果の一部をミニ展示として一般公開することを目標に、当館所蔵看板・表札資料の調査と展示設営をおこないました。

展示内容についての打ち合わせの様子

学生が制作したポスター

Sketches of Science at Tohoku University 参加企画展

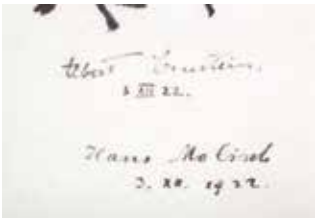
「東北大学とノーベル賞」展の開催

平成26年７月30日～８月31日　史料館第１企画展示室

７月30日から８月31日まで、ノーベル博物館及びリンダウ・ノーベル賞受賞者会議と東北大学の共催で、50名を超えるノーベル賞受賞者たちの研究成果をその人柄とあわせて紹介する展示会”Sketches of Science at Tohoku University”が開催されることとなり、当館でもこの展示会に伴う大学側の独自企画として「東北大学とノーベル賞」を企画・公開いたしました。

展示会では、過去に東北大学を訪れた受賞者の中のうち、アインシュタイン、ニールス・ボーア、湯川秀樹、ハイゼンベルクなどといった20世紀の科学史を切り開いた錚々たるメンバーについて、彼らが東北大学を訪問した際に遺した自筆のサインや写真などの貴重資料を、本学訪問にまつわる様々なエピソードとあわせて紹介しました。また戦後間もない時期にノーベル賞受賞の有力候補と呼ばれた、本学理学部の野副鐵男教授の関係資料をあわせて紹介しました。野副教授は交流のあった世界中の化学者数千名の自筆サインを収集保存しており、そこにも30名を越えるノーベル賞受賞者の自筆サインが記されています。

展示期間中は754名の来館者があり、20世紀を代表する科学者たちが本学に遺した足あとに多くの方々が見入っていたようです。



A・アインシュタイン

湯川　秀樹

N・ボーア

W・ハイゼンベルク

●エレベータ工事に伴う展示室閉鎖のお知らせ

館内エレベーターの増設工事に伴い、10月１日以降当面の間、展示室の一般公開をお休みする予定です。公開の再開期日が決まりましたらあらためてホームページ上などで告知いたします。ご迷惑おかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

東北大学史料館だより　第21号　2014年９月30日発行
編集・発行　東北大学学術資源研究公開センター史料館
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1　TEL 022-217-5040
E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp　URL http://www2.archives.tohoku.ac.jp/